作家・北杜夫と躁うつ病
― 初期作品の系譜 ―

高　橋　　徹（信州大学総合健康安全センター・
信州大学医学部精神医学教室）
松　下　正　明（東京大学名誉教授）

〈要旨〉作家・北杜夫（1927-2011 年）は、純文学『幽霊』『夜と霧の隅で』、大河小説『楡家の人びと』『輝ける碧き空の下で』、旅行記・随筆『どくとるマンボウ航海記』『どくとるマンボウ青春記』、ユーモア小説『船乗りクプクプの冒険』『さびしい王様』、評伝『茂吉評伝四部作』など、多彩なジャンルの代表作をもつ。本論では、これら主要な作品群を、おおまかに「自伝的小説」「異国小説」「エッセイ」「ユーモア小説」に分類した。この四つのジャンルの作品は、双極性障害が顕在発症した 39 歳以前に、それぞれ初期作品が創作されており、作家としての長いキャリアの萌芽は、作家活動の初期には確立されていたと考えられた。また各領域が相互に影響を及ぼすことで新たな創作につながったものと考えられた。晩年の小説『巴里茫々』は、「自伝的小説」「異国小説」「エッセイ」の要素が投入された重要作品の一つであることを指摘した。

１．はじめに

作家・北杜夫（1927-2011 年）を対象として、第一報では、北杜夫の双極性障害（躁うつ病）の診断と大まかな病状把握を [53]、第二報では、顕在発症前の精神状態が創作に及ぼした影響に関して考察した [54]。本論ではそれらを踏まえて、北杜夫の作品論を主テーマとする。北杜夫の創作活動には、双極性障害による気分変動が影響を及ぼしていると考えるが、一方で、その活動は初期から晩年までほぼ途切れることなく維持されている。北杜夫が本格的な作家デビューをした 1960 年（33 歳）から 2011 年（84 歳没）までの 52 年間に、初出の単行本を発刊していないのは 2 年のみ（2006 年：79 歳、2008 年：81 歳）である（巻末参考資料）[53]。これは北杜夫が、小説や随筆、評伝、対談など、多様な創作分野をもっていたことが一因と考えられる。

日本近現代文学を専門とする石原千秋は、2012 年に企画された作家・磯﨑憲一郎との対談のなかで、「私のなかには『三人の北杜夫』がいるんです。詩人が小説を書いている『初期の北杜夫』と、『年代記を書いている北杜夫』、それから『〈どくとるマンボウ・シリーズ〉の北杜夫』です。それぞれの北杜夫は、まんべんなく上手に混ざり合っています。そこが面白い」と述べている [4]。この石原の分類は、北杜夫の作品を、①『岩尾根にて』『狂詩』『谿間にて』『幽霊』などの初期作品、②『楡家の人びと』『輝ける碧き空の下で』に代表される大河小説、③『どくとるマンボウ航海記』『どくとるマンボウ青春記』などの「どくとるマンボウ・シリーズ」の三つにわける類型である[注1]。

北杜夫自身は、79 歳時発刊の『どくとるマンボウ回想記』において、「私はかなり長いこと小説や雑文を書いてはきたが、残せる作品はごくわずかである」との書きだしで自作を振り返っている [30]。北はまず『楡家の人びと』を「三代にわたるわが家の歴史をつづったもので、自分でも納得できる長篇である」、さらに『幽霊』『木精』を「ほとんどフィクションとして、自己を語った小説である」と解説している。次に『白きたおやかな峰』『酔いどれ船』『輝ける碧き空の下で』をあげて、特に『輝ける碧き空の下で』を「私のライフワーク」と述べている。自己評価できる短篇作品として、『羽蟻のいる丘』『岩尾根にて』『黄いろい船』をあげ、そして最後に、「どくとるマンボウ・シリーズ」「ユーモア小説」「茂吉四部作」の解説を行っている。このなかで北は、「私は純文学小説とエッセイのほかに、かなりの中間小説[注 2]を書いたが、そのほとんどはユーモア小説である」「私の文学の特色は、一つは抒情性であり、もう一つはユーモアである」と述べている。よってこの自作解説に基づけば、①『楡家の人びと』『幽霊』『輝ける碧き空の下で』や短篇小説などの「純文学小説」、②『どくとるマンボウ・シリーズ』に代表される「エッセイ」、③「ユーモア小説」、④その他（評伝等）、といった作品分類も可能である。

北杜夫が自作を語るにあたって、まず『楡家の人びと』『幽霊』『木精』をあげ、「わが家の歴史をつづった」「ほとんどフィクションとして、自己を語った小説」と解説した点は注目すべきである。本三作品以外にも、初期作品の『百蛾譜』『狂詩』や、晩年の作品である『母の影』などは、この「自伝的小説」の系譜に位置づけられるといってよい。

もう一つ注目すべきは、『白きたおやかな峰』『酔いどれ船』『輝ける碧き空の下で』を連続して紹介している点である。『酔いどれ船』の解説では「作者自身が意気ごみすぎたための失敗作である」とまで書いているが、それでも本作を『白きたおやかな峰』と『輝ける碧き空の下で』の間に位置づけたことには、おそらく意味がある。この三作品に共通するのは、「異国の地を舞台とした小説」という点である。これも初期作品『谿間にて』『夜と霧の隅で』[注 3]から晩年作『巴里茫々』まで続く北作品の系譜のひとつである。

よって本論では、純文学小説を「自伝的小説」と「異国小説（異国を舞台とした小説）」とにわけ、これに「エッセイ（マンボウ・シリーズ）」と「ユーモア小説」とをあわせて、四群に分類することにした。この分類を用いて、体系的な北杜夫の作品論を考察していく。本研究は、信州大学医学部医倫理委員会の承認を得ている(no. 3477)。敬称は略させていただいた。

２.「自伝的小説」「異国小説」「エッセイ」「ユーモア小説」

この四群にわける分類を軸として、発表年順（上から下に流れる）に配置した主要作品の系統樹を作成した（次項：図 1)。

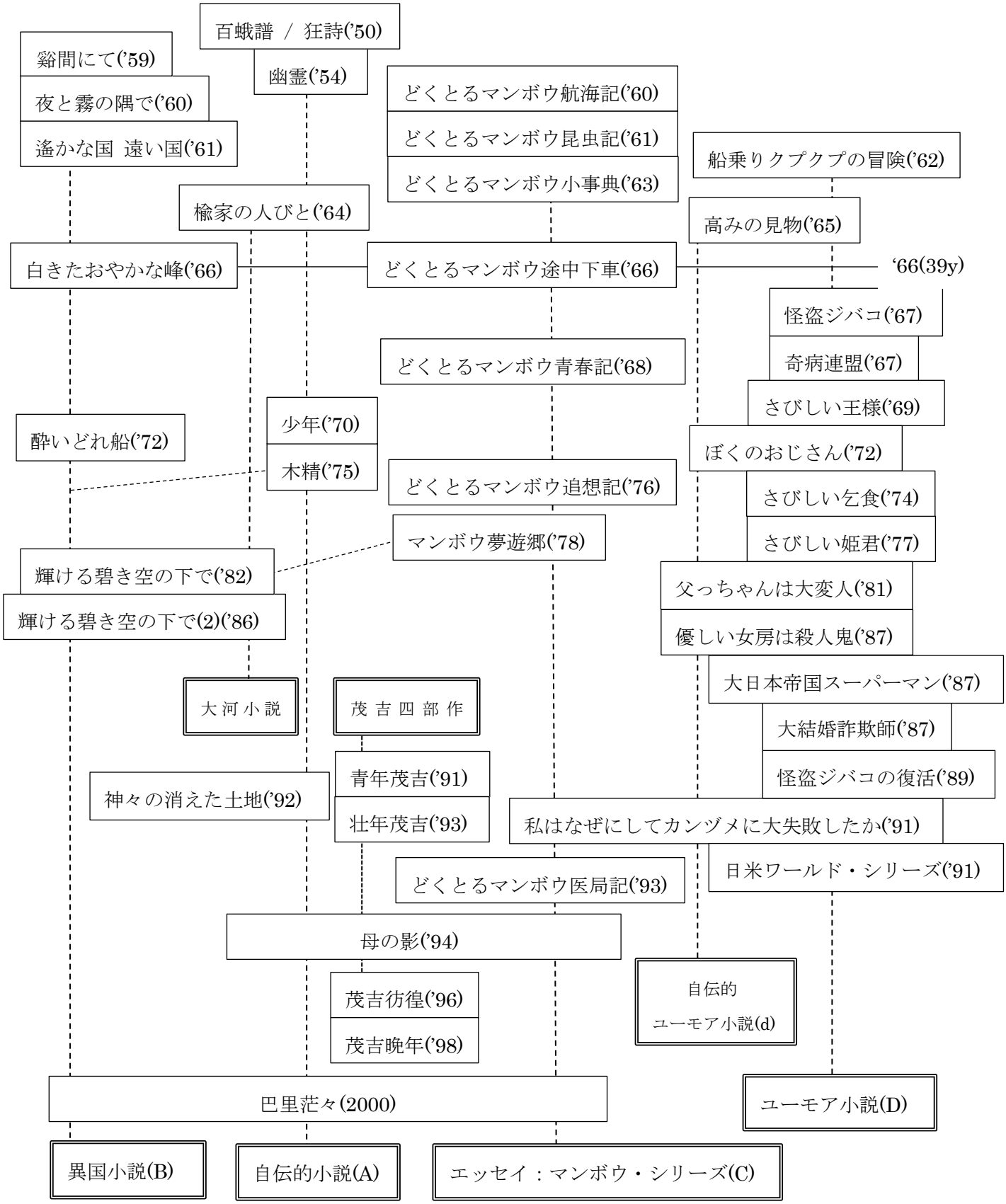

百蛾譜 / 狂詩('50)
谿間にて('59)
幽霊('54)
夜と霧の隅で('60)
どくとるマンボウ航海記('60)
どくとるマンボウ昆虫記('61)
遙かな国 遠い国('61)
どくとるマンボウ小事典('63)
船乗りクプクプの冒険('62)
楡家の人びと('64)
高みの見物('65)
白きたおやかな峰('66)
どくとるマンボウ途中下車('66)
'66(39y)
怪盗ジバコ('67)
どくとるマンボウ青春記('68)
奇病連盟('67)
さびしい王様('69)
少年('70)
酔いどれ船('72)
ぼくのおじさん('72)
木精('75)
どくとるマンボウ追想記('76)
さびしい乞食('74)
マンボウ夢遊郷('78)
さびしい姫君('77)
輝ける碧き空の下で('82)
父っちゃんは大変人('81)
輝ける碧き空の下で(2)('86)
優しい女房は殺人鬼('87)
大日本帝国スーパーマン('87)
大河小説
茂吉四部作
大結婚詐欺師('87)
青年茂吉('91)
怪盗ジバコの復活('89)
神々の消えた土地('92)
壮年茂吉('93)
私はなぜにしてカンヅメに大失敗したか('91)
日米ワールド・シリーズ('91)
どくとるマンボウ医局記('93)
母の影('94)
自伝的
ユーモア小説(d)
茂吉彷徨('96)
茂吉晩年('98)
巴里茫々(2000)
ユーモア小説(D)
異国小説(B)
自伝的小説(A)
エッセイ：マンボウ・シリーズ(C)

図 1. 作品系統樹

この分類に該当しない作品（対談、短篇小説の一部、書簡集、詩集、歌集、童話等）、あるいは該当しても省略した作品（短篇小説の一部やマンボウ・シリーズの多く等）も存在する。ただし、本論で考察する北杜夫作品の文学的（あるいは病跡学的）な相関関係を理解するには、図内でとりあげた作品で必要十分と考えた。西暦年は、単行本の発表年で統一してあるが、短篇作品である『百蛾譜』『狂詩』『谿間にて』と、『私はなぜにしてカンヅメに大失敗したか』『巴里茫々』は、初出の雑誌掲載年としてある[注4]。

茂吉四部作は、歌人である父・斎藤茂吉の「評伝」であるが、晩年のもっとも大きな創作活動（1991-98 年：64 歳-71 歳、1999 年に『茂吉評伝四部作』にて大佛次郎賞受賞）であるため、図に組み込んだ。内容的には、エッセイ（随筆）に近縁もしくは包含される作品とみなした。

図 1 におけるその他の記載事項としては、『楡家の人びと』と『輝ける碧き空の下で』を「大河小説」として結びつけ、南米旅行記『マンボウ夢遊郷　―中南米を行く』は、小説『輝ける碧き空の下で』の取材旅行を基にしているため、両作品を点線で結びつけた。また『木精』は「自伝的小説」であるとともに「異国小説」でもあるため、「異国小説」のラインにも点線で結びつけた。初発の躁病エピソードを境として、その前後の作品を比較するために、1966 年（39 歳時）上に境界線をつけてある。

A．自伝的小説

自伝的小説として、『百蛾譜』『狂詩』から『巴里茫々』までの 9 作品を図に記載した。（これ以外にも、自己の体験を基にしたと想像される短篇小説はあるが、ここでは割愛する）。本作品群は、主に少年期・青年期の体験、記憶、追想という物語形式を特徴としている。ただし『楡家の人びと』は、北自身の一家（斎藤家）をモデルに、家族三代の繁栄と没落を描いた「大河小説」であり、詳細な取材・資料から起草した年代記・群像劇（ノンフィクション）を基に、北杜夫の創造（フィクション）を加えて物語を創作するスタイルとなっている[注5]。この創作スタイルは、その後、『輝ける碧き空の下で』（50 歳台の代表作にして最大の長篇作品）でも踏襲されている。

代表作のひとつである『幽霊』を、北杜夫は「初期作品の集大成」と位置付けている。「昭和二十五年、私の二十三歳の年は、このほかに『幽霊』をも書きだしていて、なかなか充実した年であった。『幽霊』は、はじめ母が家出するところまでの短篇として出発し、次第に長篇となっていったものである。非常にぼつぼつと書きつがれ、昭和二十七年にひとまず完成した。その年から翌年にかけ、『文芸首都』に分載した。『狂詩』のある部分は、『幽霊』の中へ、またある部分は『楡家の人びと』の中へ利用されている。（中略）要するに、私の初期作品の集大成が『幽霊』といってよく、私としてはこの作品を読んでもらうことで、ここに集めた他の作品を切り捨ててもよいと思ったのである」[8,12)注6]

処女作には、そのクリエイターのすべてが包含されているとよくいわれるが、北杜夫も辻邦生との対談で、同様の内容を語っている。「若い日の直観的なものから、ひとりの人間は、それほど越えられないということが、あるかも知れない」「あとでいくら巨大な作品を生んだにしても、処女作にはその〈萌芽〉って言うか〈暗示〉って言うものが含まれている」[10)]『幽霊』は、「初

期作品の集大成」であり、処女作（自費出版ではあるが、単行本化された初作品）であり、北作品の「抒情性」[30]を代表する小説である。

『幽霊』（副題は「ある幼年と青春の物語」）は、母（斎藤輝子）への思慕が通奏低音として流れており、そこから汎化された異性への想いが主題となっている。さらに『幽霊』に続く自伝的小説シリーズ第二作の『木精』（副題は「或る青年期と追想の物語」）では、人妻との不倫関係に終止符を打つためにドイツ留学する日本人精神科医が主人公として描かれる。この女性関係は北自身の実体験であり、「照洋丸での航海」[7]を「ドイツ留学」に置き換えて創作したものと考えられる。

『少年』は、旧制松本高校時代の北杜夫自身がモデルであり、1968 年に雑誌「婦人公論」に掲載、1970 年に中央公論社より単行本が発刊されているが、創作自体は 1950 年であり [12]、初期作品である『百蛾譜』『狂詩』と同時期に執筆された作品である。

『神々の消えた土地』[21]も、1992 年（65 歳時）に発刊された作品だが、創作自体は最初期作品として位置づけられることが「あとがき」に記されている。「この小説は私が大学二年二十三歳のとき、創作ノートに半分書いておいたものである。『幽霊』を書きだす前のことであった。先頃読み返してみて、いかにも若書きではあるが、それほど捨てたものでないように思われたので、後半を書きついだ。ただ東京空襲の場面は『楡家の人びと』に利用したので、更めて書き直した。後半の筋書きも、創作ノートにあるメモに従った。」[21]

『母の影』（1994 年：67 歳）と『巴里茫々』（2000 年：73 歳）は、「自伝的小説」というよりも、「自伝作品」といってよい。『幽霊』や『木精』では、自伝的内容にフィクションとしての加工がほどこされているが、『母の影』『巴里茫々』は、実名で実際にあった出来事を記述している。

B．異国小説

北杜夫の小説には異国を舞台にしたものが初期作品から数多くある。友人の辻邦生に送った手紙（「どくとるマンボウ航海」[7]中の 1958 年 11 月に、シンガポールからパリの辻に送った書簡[33]）にも、その旨を記している。「僕は、今年の春まで書けなくって、秋から四つほどつづけて発表した[注 7]。新潮にメキシコの話、近代文学にベルリンの話、及び地球外の話、首都には朝鮮の話、みんな日本以外のことばっかり書いた[注 8]。でるとき新潮に台湾の話をおいてきた。新潮の女の記者が、北さんは外国はどこへ行ったのですかと訊くので、実はどこもないと白状したら、そのあと『岩尾根』をよんで、山には本当に登ったことあるんですか、と云いやがった。今度の航海すめば、でかい顔してウソをかける」[33]

「台湾の話」は、1959 年に芥川賞候補となった『谿間にて』である。1960 年に芥川賞を受賞した『夜と霧の隅で』もドイツを舞台としており、航海前から創作を開始している。そもそも北杜夫の異国への憧れが、照洋丸に船医として乗り込むという「どくとるマンボウ航海」の原動力であっただろう。

『遙かな国　遠い国』は 1961 年刊の 5 作品を収めた初期短篇集で、表題作『遙かな国　遠い国』は、北海道の鮭鱒漁船に雇われた少年がソ連に抑留される筋書きであり、「どくとるマンボ

ウ航海」で照洋丸の乗組員から聞いた話を根底に創作されている[36)]。『白きたおやかな峰』は、1965 年（38 歳時）に京都府山岳連盟のカラコルム・ディラン峰登山隊に医師として参加した体験を土台にしている。また『酔いどれ船』は全 5 話のオムニバス小説（主人公の一族にまつわる 5 つの物語。舞台はメキシコ、上海、ロンドン、ネパール、カナダ、米国）だが、その第 4 話は、ブラジルに移住した伯父をもつ精神科医の主人公が、カナダとアメリカに渡り、精神病院に勤務する話である。北自身の精神科医としての経験や、海外留学・勤務経験のある慶應大学神経科の同門医師[7,11,22)]から聞いた体験談などを基にして創作されたと考えらえる[注9]。

南米移民の歴史を描いた最大の長篇小説が、『輝ける碧き空の下で』である。綿密な取材と資料収集に基づいており、事前の取材旅行は『マンボウ夢遊郷　―中南米を行く』として書籍化されている[注10]。『輝ける碧き空の下で』は、創作プロセス（資料収集と綿密な取材）や小説形態（多世代にわたる大河小説・群像劇）、作品スタイル（ノン・フィクションを下敷きに、フィクションを上乗せする）において、『楡家の人びと』の流れを汲む作品といってよい。

『巴里茫々』は、パリを舞台とした「短篇小説」とみなされているが、その内容はほぼ実話であり、北杜夫が「エッセイ」に記してきた逸話の多くが著されている。本作は「異国小説」「自伝的小説」「エッセイ」のすべてに分類可能な作品であり、これに関しては後述する。

C．エッセイ（マンボウ・シリーズ）

北杜夫を一躍ベストセラー作家にしたのが『どくとるマンボウ航海記』であり、様々な意味でエポック・メイキングな作品である。まず北自身の評価。「若い読者からの手紙では、『どくとるマンボウ青春記』がもっとも好きだというのが多いが、私自身ではマンボウシリーズの中でこの『航海記』が文学的にはいちばん上だと思っている。それは、もともと私の中にあった誇張されたユーモアと、それまで雑文をほとんど書かず、ずっとためておいた雑学めいたものを思いきりこの本に叩きこんだためであろう。」[36)]　「どくとるマンボウ」シリーズには、中央公論社から初出の 7 冊があるが[注11]、それ以外にも北杜夫の代名詞ともいえる「マンボウ」を冠した書籍は、数多くの出版社（新潮社、講談社、文藝春秋、集英社、岩波書店、読売新聞社、実業之日本社など）から発刊されている。

『どくとるマンボウ航海記』（1960 年）は、北杜夫にとって初の単行本（自費出版の『幽霊』を除く）であり、それまでの日本文学において誰もみたことのないような作品である。「私はこの本の中で、大切なこと、カンジンなことはすべて省略し、くだらぬこと、取るに足らぬこと、書いても書かなくても変わりはないが書かない方がいくらかマシなことだけを書くことにした」という「あとがき」の一文に代表されるような独特のユーモアは、それまでの文壇の流れに類するものがなく、突然変異のような作品である[注12]。作家・森禮子は、「『どくとるマンボウ航海記』とか、『どくとるマンボウ青春記』とかは、北さんの叙情性とか、ユーモアとか、批評精神とか、そうしたものがなにもかも入っていて、あれは非常に新しい文学の一つのジャンルを創りだしたのではないか」と評価している[44)]。

一般的に芸術作品は、比類ないが故に、当初は世間に受け入れられない不遇の時代を経ること

が多いものだが、本作品はその卓越した内容と形態が爆発的に受け入れられ、北杜夫を国民的なベストセラー作家に押し上げた。同年に『夜と霧の隅で』が芥川賞を受賞し、さらに『どくとるマンボウ航海記』とは対照的ともいえる小説『幽霊』が中央公論社より発刊されたことも、読者の北杜夫への関心をさらに高める要因になったと考えられる。「純文学作家」と「ユーモア・エッセイスト」という全く異質な才能を併せ持つという点は、読者が北杜夫に、「何か不可思議なもの」「創作者としての神秘性」を見出す効果を導き出したのではないかと想像する。これはクリエイターが永続的な評価を得るための必要条件のひとつといってよい[41)]。

奥野健男は、『幽霊』を読んで北杜夫の才能を高く評価し、「日本にもプルーストやトーマス・マンのような天才が生まれたと興奮した」のだが、同時に「しかし日本ではこういう天才は文壇に認められないだろうと思った」[50)]と回想している。その奥野から北を紹介された中央公論社の宮脇俊三も、北杜夫の初期作品『谿間にて』などを読み、「初々しく静謐な作品であったが、売れそうにないな」と感じたと語っている[43)]。『どくとるマンボウ航海記』を抜きにして、国民的作家・北杜夫の成立を語ることはできないといってよい。

作品自体の評価とは別に、北杜夫が『どくとるマンボウ航海記』の成功によって経済的な独立を得たことも、極めて重要な論点である。『航海記』発刊の翌年 1961 年（34 歳）に、北杜夫は慶應義塾大学病院神経科の医局を辞め、結婚して土地を購入し新居を構えている。クリエイターにとって、経済的基盤の有無はかなり重要な要素であり、芸術家では経済的な支援者（パトロン）を必要とすることが多い[1)]。北杜夫の場合、出版社である新潮社や中央公論社などがその役割を果たし、個人としては執筆・出版へと導いた奥野健男（文芸評論家）や宮脇俊三（編集者）などが関与している。作家としては埴谷雄高、三島由紀夫、遠藤周作、阿川弘之、辻邦生、なだいなだ、佐藤愛子などが有形無形の支援者としてパトロン的な役割を担ったものと考えらえる。『どくとるマンボウ航海記』の成功によって、北は医師を辞めて作家活動に専念することが可能となり[注13]、またその後の「マンボウ・シリーズ」も創作活動の継続に一役かった。躁病による株の売買で借財を負ったときも（1976 年：49 歳時）、「マンボウ」を冠した対談集を数多く出版することで、急場をしのいでいる[53)]。「マンボウ」の名がつく作品は、『どくとるマンボウ航海記』（1960 年）から『マンボウ最後の家族旅行』（2012 年）まで、実に 55 作品に及ぶ。

D．ユーモア小説

抒情性が純文学作品の特徴であれば、ユーモアがエッセイの特徴であり、双方の特徴をあわせたのがこのユーモア小説ということになる。「マンボウ派」と「幽霊派」の間であまり目立たないが、北作品を論じるうえでかなり重要な作品群である。前述したように、北杜夫自身も自作を語るにあたって、「私は純文学小説とエッセイのほかに、かなりの中間小説を書いたが、そのほとんどはユーモア小説である」と述べている。それまでにも夏目漱石の『吾輩は猫である』『坊っちゃん』のような小説はあったが、北杜夫ほどユーモアを前面に押し出し、奇想天外で荒唐無稽な物語を小説化した例は珍しく、これも北杜夫による一種の「発明」といってよい。

北杜夫は漫画の愛読者で、「どくとるマンボウ航海」に出る前に、甥に対して、「留守中の漫画

は全部とっておくように」と命令し、大量の漫画雑誌を保管させたという逸話がある[52]。また漫画賞の選考委員を務めたりもしている。初のユーモア長篇小説は『船乗りクプクプの冒険』であるが、これは長篇漫画映画『シンドバッドの冒険』（1962 年公開）の企画に、北杜夫と漫画家の手塚治虫が参加したときのアイデアがもとになっている。ただし北の出したアイデアは、製作した映画会社（東映）の上層部には不評で、ほとんど採用されなかったという[24,36]。（これに対して北は、「当然、私は不満の念を抱いた。いや、むしろ憤激に近いといってもよかった」[36]と振り返っている）。同時期に、「たまたま、中学生低学年の雑誌から頼まれたので、私は『船乗りクプクプの冒険』を連載した。つまり、『シンドバッド』のアイデアをこの童話に生かしたわけである」[36]という経緯がある。ここに幾つかの偶然が重なるわけだが、まず『どくとるマンボウ航海記』の成功により、北自身が文学におけるユーモアの可能性に気づいたこと、さらに「海に強い男」[36]と世間から認知されたことで漫画映画「（船乗り）シンドバッドの冒険」の脚本の企画が舞い込んだこと、そしてそこでのアイデアを少年向け雑誌の連載で小説化したことである。ここにおいて、「漫画」的な発想を、「童話」というジャンルのなかで、「連載小説」として創作する、というスタイルが確立する。この後に続くユーモア小説『奇病連盟』『高みの見物』は新聞連載小説であり、『ぼくのおじさん』は中学生雑誌で連載、さらに「十歳から百歳までの子供のための童話シリーズ」と銘打った『さびしい王様』『さびしい乞食』『さびしい姫君』も雑誌の連載で書き上げている。

北自身の作品評は以下。「『奇病連盟』は、私が自作の中でもっともキライであった作品で、絶版にしようかとさえ考えた。発想はおもしろいのだが、連載期間も限られ、中途半端なものになってしまったからである」「連載が終わり単行本になったとき、この作品（筆者注：『高みの見物』）は私のもっとも嫌いなものになった。（中略）本気で絶版にしようと考えたこともある。」「（筆者注：『ぼくのおじさん』を）読み返してみると、『高みの見物』とはまた違ったおもむきがあって、残しておいてもよいような気もする。同じころ書いた『船乗りクプクプの冒険』に比べるとずっと劣るが。」「その書きなぐりが、この童話（筆者注：『船乗りクプクプの冒険』）を悪くも良くもしたようだ。私のもっと慎重に書いた『さびしい王様』シリーズより買ってくれる大人もいる。また、小学生からも手紙がくるが、たいていこの作品から私のものを読みだしているようだ。」[36]

北杜夫自身は、ユーモア小説のなかで、『船乗りクプクプの冒険』をかなり気に入っていることがわかる。本作は当時の北杜夫がもっとも速く執筆したとする作品であり、北自身は「書きなぐり」と形容している[36]。物語の構成（起承転結）よりも、創作時の勢いで書きあげたものと考えられ、枠にはまらない奇想天外なストーリーは、北作品のなかでも群を抜いている。一方、おそらくはその結果として、物語の最後に「結末らしい結末がない」という特徴がある。これは『船乗りクプクプの冒険』以外に、『さびしい王様』や、あるいはユーモア小説ではないが『白きたおやかな峰』にもみられる特徴である。

作家・埴谷雄高がもっとも高く評価した北作品は『さびしい王様』だが[16,19]、北も『さびしい王様』『さびしい乞食』『さびしい姫君』の三作品のなかでは、『さびしい王様』をもっとも評価

している。北は、「『王様』だけは少し自負はありますが、あとの『乞食』と『姫君』は無理に終わりをつけようとした失敗作です。」[19]と述べており、無理に結末を作ろうとしないほうが、質の高い作品ができると考えていた節がある[注14]。

３．躁状態と創作

前報において筆者らは、『どくとるマンボウ航海記』の創作に気分変動が関与していた可能性を指摘した[54]。顕在発症後の躁状態で執筆された『白きたおやかな峰』に関しては、「前年に日本のカラコルム登頂に挑戦して失敗した山岳隊に医師として参加した体験をもとにした長編書き下ろし『白きたおやかな峰』を猛スピードで書き上げてしまった。しかし、躁状態だから推敲する間もなく手が勝手に動いて書き進み、それが災いして失敗作になってしまった。」[28]と北杜夫は語っている[注15]。「猛スピードで」「手が勝手に動いて書き進み」という表現が、躁状態における執筆の実態を表していると考えられ、北杜夫の精神状態を推察する際に、執筆速度がひとつの目安になる可能性が示唆される。

最後の躁病とされる 1999年-2000年（72-73 歳）にもよく似たエピソードがある。「朝六時に目が覚めて、これまた半日で五十枚近い小説を書いた[注16]。その速度はくだけた雑文を書くより速く、純文学小説なのに、自分でも信じられないほど推敲も苦吟もせず、さらさらと筆が進んだ。ルナールが『文章は息をつくように書け』と言ったが、そんな具合に小説が書けたのである。私は思わず妻に、『ぼくはひょっとすると天才かもしれない』と言うと、妻は平然と、『あなたはもともと天才なのよ』とこともなげに言った。」[28]「仕事もずっといい加減なエッセイくらいしかできぬと諦めていたのが、娘に釣られてちょっと競馬をやったところ、何年ぶりかで『水の音』[27]という短篇も書けた。ほんの半日足らずの時間にである。これには自分であきれたほどだ。」「競馬をやったおかげで、私はたった半日にして二十三枚の短篇をでっちあげてしまった。我ながら恐るべき男と言わねばならぬ。」[31]

純文学小説は遅筆であり、エッセイは比較的速く書けると北杜夫は繰り返し語っているが[13,35]、必ずしも純文学だから執筆速度が遅いとは限らず、躁状態下であれば純文学小説の執筆もかなり速いことがわかる。また必ずしも躁状態でユーモア小説を書き、うつ状態で純文学小説を書いているというわけでもない。『さびしい王様』は、創作開始時（1968 年 6 月 30 日）は躁期だったものの、9 月には鬱期となり、短期連載で完結する予定を長期連載に変更している[36]。同作の執筆に関して北杜夫は、「世間の人は、私がユーモアものを書くときは躁期だくらいに考えているらしいが、実情はこういうときもある。他の原稿はすべて断って、憂鬱な気分のうちに、一月わずか五十枚の原稿を遅々として書き、ぐったりしていると、次の〆切日がアッというまに迫ってくる。頭はどんよりしているのに、一応おもしろおかしく書かねばならぬことは、かなり辛いものである。」と述べている[36]。

1980 年（53 歳）は鬱期から躁期となった年で、当時は『輝ける碧き空の下で』と『父っちゃんは大変人』を執筆していた。翌年に掲載されたエッセイには、鬱から躁への移行期（夏の軽井

沢に滞在時）に最も執筆速度が速かったことが記されている。「このたびの私の躁病は、昨年の九月から始まった。その前の六、七月、胃ガンを怖れてウツ病に陥った」。しかし検査結果に問題がなかったことから、「私は次第に元気になってきた。ただ、その検査のまえは、二つの連載を辛うじて果たしながら、ウツウツとして毎晩酒を飲んでいた。頭は重く、何をするのも嫌で、このままでは二つの連載をこなすのがせい一杯だと思っていた。（中略）昨年の夏、私は次第に元気になってきた。（中略）けれども、それはまだ躁病とはいえなかった。（中略）その間に、私の仕事ははかどっていった。『父っちゃんは大変人』というユーモア小説を連載していたが、初めは月に三十枚書くのがやっとだったのが、七、八十枚書くようにもなった。おまけにシメキリが過ぎてもなお書きつづけ、三ヵ月ぶんくらいを一月で書いてしまった。（中略）起床も鬱のときには夕方だが、午前中から起きるようになった。そして、夕食まで『父っちゃんは大変人』を書きつづけた。その頃、私がもっとも力を集中していたのはブラジル移民の小説『輝ける碧き空の下で』であったが、それをなんとか済まし、あと気楽なユーモア小説にかかると、驚くほど筆がすすんだ。過去二十年以上の文筆活動の中で、もっとも早く筆が動いた。（中略）さて、躁病の気味を起こした私は、九月になると、アッパレ躁病患者となってしまった。私は八月三十一日に帰京して、ただちに株を買い始めた。躁病は仕事をするのにはよいけれど、株に関しては前回のように破産につながる。それから、女房と私の一騎打ちも始まるのである。」[14)]

北は、あくまでも株取引を開始した 9 月を躁病のはじまりとみなしているが、その前段階でみられた過活動期（作家人生で最速の執筆）も、既に十分躁病エピソードとみなしてよいと考えられる[注 17]。

４．初期作品の系譜

大きく四つにわける作品群の系譜を図示したが（図 1)、どれもその起点は、これまで言われてきた初発の躁病エピソード（39 歳）より前にあることがわかる。特に純文学に位置する「自伝的小説」と「異国小説」は、無名時代の約 10 年間（1950-59 年：23-32 歳）に初期作品の源流があり、文学青年の執筆意欲と情熱が、創作の根幹にあったと考えられる。

一方、エッセイとユーモア小説の起点は、『どくとるマンボウ航海記』と『船乗りクプクプの冒険』である。これは躁病エピソードの顕在発症とみなされている 39 歳時（1966 年）より以前に発表された作品だが、その創作には、躁的なエネルギーの奔流が関与していたものと想像する[54)]。北杜夫は長女・由香との対談で、「(筆者注：うつ病のときよりも）躁病の方が原稿のできはいい」と述べるとともに、躁病のピークになると「やっぱりでたらめになる」と語っている[32)]。あるいは「殊に純文学を書く場合、ソウになりかけで、ほんの一、二オクターブ調子が上がっているときがいちばんいい。ソウの真っ盛りになると、文章が荒れてダメになる。」とも述べている[38)]。出版社（編集者）の立場からみても、軽躁状態がもっとも執筆活動には適していたようである[注 18]。新潮社で 35 年間、北杜夫の担当編集者であった栗原正哉は、追悼文において、「昭和四十一年に最初の躁状態が訪れて以来、北さんは躁鬱の波に翻弄されることになる。躁の高揚

を執筆の推進力にできるうちはよかったが、激しい躁状態になると文章も構成も乱れ、やたらと対談を引き受け、たくさんの雑文を書きながし、そして株に熱中した。」[40]と記している。

北杜夫の躁うつ病（双極性障害）の発症起点を厳密に特定することは難しいが、エッセイとユーモア小説の出発点となった『どくとるマンボウ航海記』（1960 年：33 歳時刊）と『船乗りクプクプの冒険』（1962 年：35 歳時刊）の創作時には、少なくとも軽躁状態の兆候は呈していたものと考えられる[54]。そしてこの二作品の成功が、その後に続く多くの作品群の起爆剤となり、また純文学作品（自伝的小説、異国小説）とも相互に影響を及ぼしながら、晩年まで続く長い作家活動の基盤になったと考える。

５．小説のなかの自伝的要素

ユーモア小説のなかでも『高みの見物』『ぼくのおじさん』『父っちゃんは大変人』『優しい女房は殺人鬼』は、自己をモチーフとした自伝的要素の強い作品である。『高みの見物』はゴキブリを主人公として、漁業調査船の船医と SF 作家が登場し、北杜夫の医師や作家としての経験と昆虫学の知識が反映されている。また『ぼくのおじさん』は北杜夫自身と甥（兄・斎藤茂太の息子）や叔父[注19]、『父っちゃんは大変人』は自身の躁病的アイデア[注20]、『優しい女房は殺人鬼』は喜美子夫人をモデルにしている。

「異国小説」のなかにも自伝的要素を含む作品は存在する。もっともわかりやすい例は、カラコルム登山隊の体験を基にした『白きたおやかな峰』である。本作は、「異国小説」であるとともに「自伝的小説」でもあり、またノン・フィクションの部分は旅行記として読むこともできる。「自伝的小説」「エッセイ」「異国小説」「ユーモア小説」の関係を模式化した図を作成した。（次項：図 2)。『白きたおやかな峰』は、「異国小説」と「エッセイ（旅行記)」と「自伝的小説」が重なる部分（＊）に位置づけられる作品と考えられる。（その他、図 1 のＡ：自伝的小説、Ｂ：異国小説、Ｃ：エッセイ、Ｄ：ユーモア小説、ｄ：自伝的ユーモア小説を、図 2 の該当箇所に記した)。

南米移民の歴史を描いた長篇小説『輝ける碧き空の下で』は、実在の人物と歴史を基にした群像劇だが、一方で北杜夫が創作した人物も登場する。「あとがき」で北杜夫は、「このかなり長い小説の中で多少人間像が描かれているのは、共に創造人物であるホラ吹きの山口佐吉と、逆に心配性になってしまう佐久間四郎くらいのものであろう。この二人は有体に言って移民の象徴でもある。事実、ブラジルの日本人（殊に一世）の中には、ありもしない大鉱山の持主だと威張っている躁的な人と、逆に絶望して鬱的になっている人とがかなり多いようだ。」と著しており、北はこの二人の登場人物に、自身の躁的な部分とうつ的な部分を投影させたと考えられる。山口佐吉は大言壮語の誇大妄想癖のある人物で、老年期には「怪魔王」と自称し、興奮・妄想状態となり精神病院に入院となる。佐久間四郎は、人妻に純情一途な恋をするが成就せず、その後、不眠症、憂うつ症となってしまい、戦後は日本が勝ったと信ずる「勝組」のひとりとなるが、帰国詐欺にだまされ土地財産を失ってしまう。『輝ける碧き空の下で』は、北の 50 歳代を代表する長篇

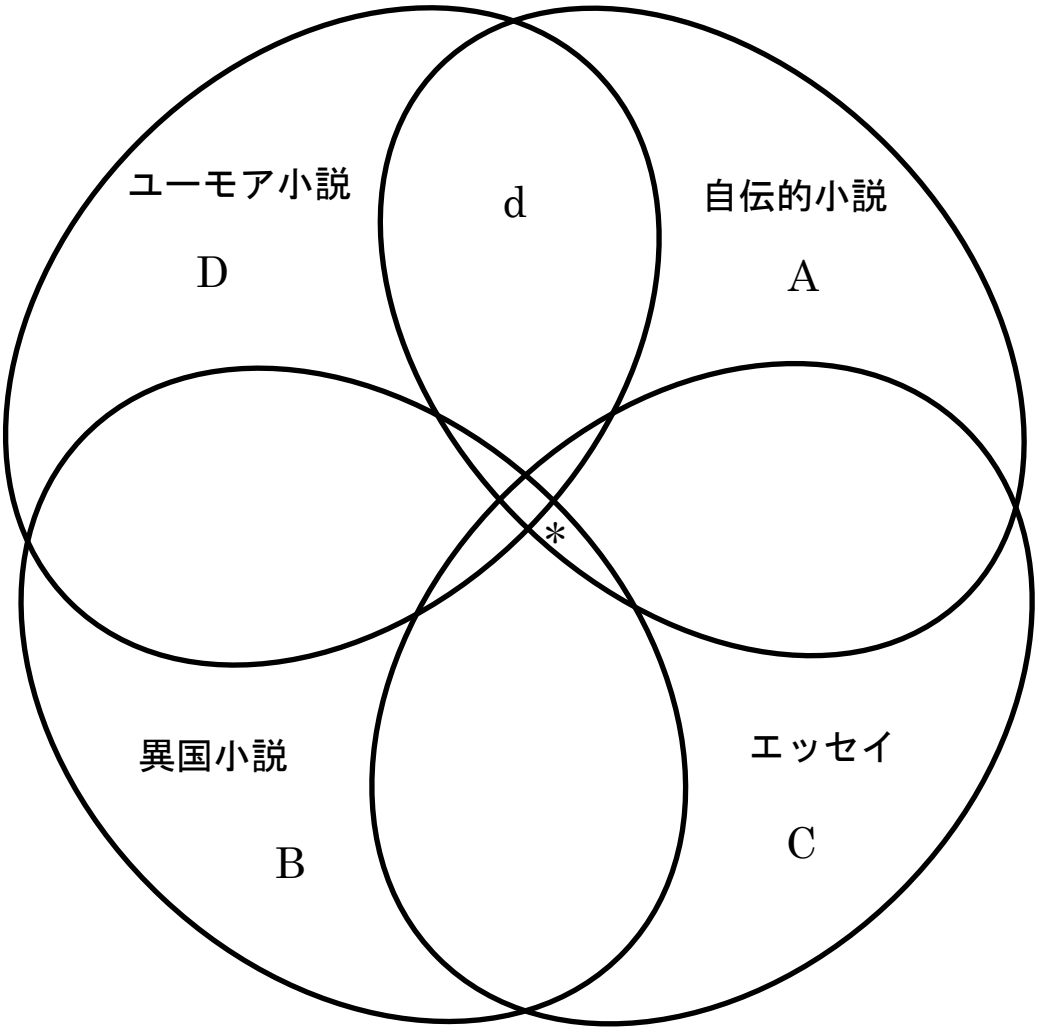


図 2.　作品模式図
＊『白きたおやかな峰』
d：自伝的ユーモア小説

小説であり、長年の躁うつエピソードを経験した北杜夫が、自己の病状を客観視し、それを文学的な表現にまで昇華した作品ともいえるだろう[注21]。

60 歳台に発表された『私はなぜにしてカンヅメに大失敗したか』は、「これは随筆とも思われようが、私には珍しい完全な私小説である。」との一文ではじまり、「エッセイ」と「ユーモア小説」の両方に分類される佳作である。同年発表の『日米ワールド・シリーズ』も、作家仲間の遠藤周作、阿川弘之、佐藤愛子と躁うつ病の北自身が登場するナンセンス・コメディで、かなりの破天荒なユーモア小説となっている。『怪盗ジバコ』『父ちゃんは大変人』『大結婚詐欺師』『日米ワールド・シリーズ』等の小説には、登場人物として「北杜夫」が出てくるが、最初のユーモア小説である『船乗りクプクプの冒険』からして既に、「キタ・モリオ」が登場している[注22]。

６.『幽霊』『木精』と『巴里茫々』

純文学作品とマンボウ・シリーズとの関係を、北杜夫は次のように述べている。

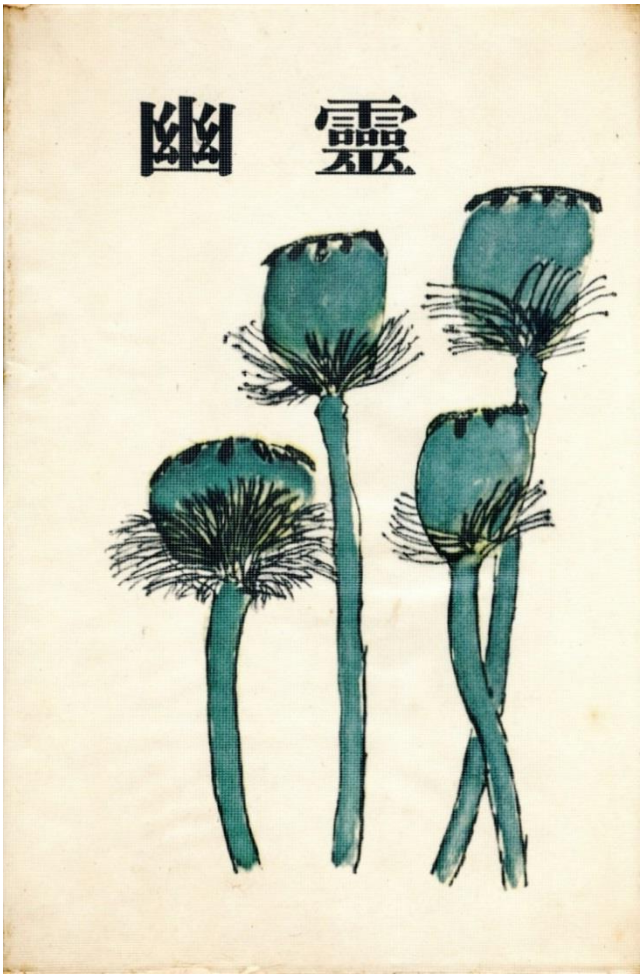
「私は純文学だけを書いてゆくつもりであったが、自分の筆力と文芸雑誌の安い稿料を考えると、とても筆一本で食べてゆけそうになかった。また、金のために小説を書くことも不純に思えた。そこで私は頼まれた雑文をたいてい引き受け、それで生活を支え、その間に自分にふさわしい小説をコツコツと書いてゆこうと考えた。そのやり方は、本来ならあながちわるくない作戦だったと今でも思う。しかし、やがて私は『どくとるマンボウ航海記』を書き、それがベター・セラーになり、芥川賞を貰った『夜と霧の隅で』より、マンボウの名のほうが通りがよくなってしまった。勢い、それと似た原稿の依頼が多くなった。私は初めて居候していた兄の家を出、自宅を持ったので、ついつい雑文の仕事をつづけた。そうして、そうした雑文集のほうが、苦労して書きあげた短篇集より、遥かに売れたのである。（中略）それにしても、だらしなく書きつづった雑文集を出すことには羞恥に近い念を抱く。しかし、私の純文学作品よりもそれを好んでくれる読者がいることは、作者の本意でないにせよ、やはり私という作家の存在自体につながっているのであろう。」[36)]

さらにエッセイ（随筆）と自伝的小説との関係は北杜夫作品において実に密接であるが、それに関しても、北自身はアンビバレントな心情を語っている。

「『航海記』を書いてよかったのかどうか、私には二つの考えがある。一つは私の唯一の特色であるユーモア文学がそこから生まれてよかったという意識と、もしそれを書かなかったなら『幽霊』の続篇である『木精』などはその材料を使ってもっと早く書けたかもしれないという未練である。」[15)]「くだらない随筆だったら人並の速度で書けるし、それで、金のために小説を書いちゃいけないと思いまして、まず雑文でもって生活費を稼いで、金とは関係なく小説を書こう、と思い込んだのです。（中略）それをぼく、今後悔してますね。あのころはあまりに雑文を書きすぎたという気がします。（中略）雑文というのは、どんなくだらない雑文にしてもなにかが自分から出ていってしまうわけですね。（中略）そうすると、あとで小説やなんかに使えないわけです。」[35)注23]

ここから理解できることは、北文学の小説の多くは、自己体験を土台に創作されているということである。その自己体験をそのまま随筆（エッセイ）で消費してしまったため、小説の創作材料が枯渇する結果になったことを北杜夫は後悔している。自己体験を土台にした小説の代表作が『幽霊』であり、その続篇が『木精』である。初版である自費出版の『幽霊』（1954 年）には、最終頁に「長篇の第一部。」とあり、北杜夫は当初から続篇を作るつもりでいた（図 3：初版『幽霊』）。この「自伝小説シリーズ」は、全三部作、或いは四部作となる構想だったが [35, 48]、第三部以降は未完に終わった。

北杜夫の『木精』執筆に対する想いは、辻邦生が記した「私のなかの北杜夫」[55, 56] のなかにも読み取ることができる。「私たちはトニオ・クレーゲル[注 24] のようにいつか文学者になって長篇小説を同じ雑誌に並んで連載したいと夢想していたのであった。そうした夢が昨年、北杜夫が渾身の力を振りしぼって書いた『木精』によって果たされたのである。私は昭和 49 年 1 月号の『木精』と『春の戴冠』の並んだ雑誌「新潮」を眺めながら、それ自身『幽霊』の一つの主題ではな



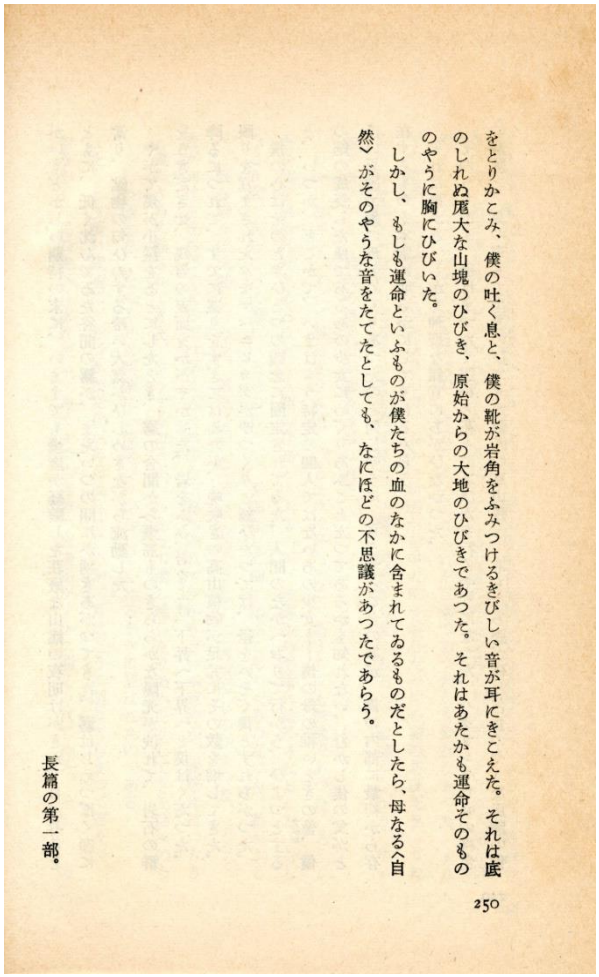

をとりかこみ、僕の吐く息と、僕の靴が岩角をふみつけるきびしい音が耳にきこえた。それは底のしれぬ厖大な山塊のひびき、原始からの大地のひびきであつた。それはあたかも運命そのもののやうに胸にひびいた。
しかし、もしも運命といふものが僕たちの血のなかに含まれてゐるものだとしたら、母なる〈自然〉がそのやうな音をたてたとしても、なにほどの不思議があつたであらう。
長篇の第一部。
250

図 3
左：初版（自費出版）「幽霊」の表紙
右：同作の最終頁。「長篇の第一部。」とある

いだろうか、と、ふと考えたりした。そしてトーマス・マンについて一緒に本を書こうとか、マンの故郷で『ブッデンブロークス』の舞台であるリューベックを一緒に訪ねようとかいった、子供っぽい当時の夢を、ほとんど五十に手の届こうとする時に、実現でき、しかもそのことがごく自然であるような北杜夫との付き合いを考えると、私はやはり稀有の友を恵まれていたと思わないわけにはゆかない。どんな幸運が私に与えられたか知らないが、少くとも北杜夫と青春に会ったことだけは、私の生れ星が幸運を指していることの証拠だといまも頑に信じている。」[55,56]（図 4：雑誌「新潮」目次）。

逆に北杜夫も、『木精』の創作に辻邦生の存在が大きかったことを語っている。「『木精』をたいそう遅ればせにも書けたのは、半分は辻邦生のおかげといってよい。昭和四十四年の夏、二人でトーマス・マンの墓を訪れ、チロルにも行ったし、四十七年の秋には、彼と一緒にチュービンゲン、ローテンブルク、リューベック、デンマークを旅した。『木精』の主人公が旅した大部分の土地は、ほとんどが辻と行っているわけなのである。」[36]

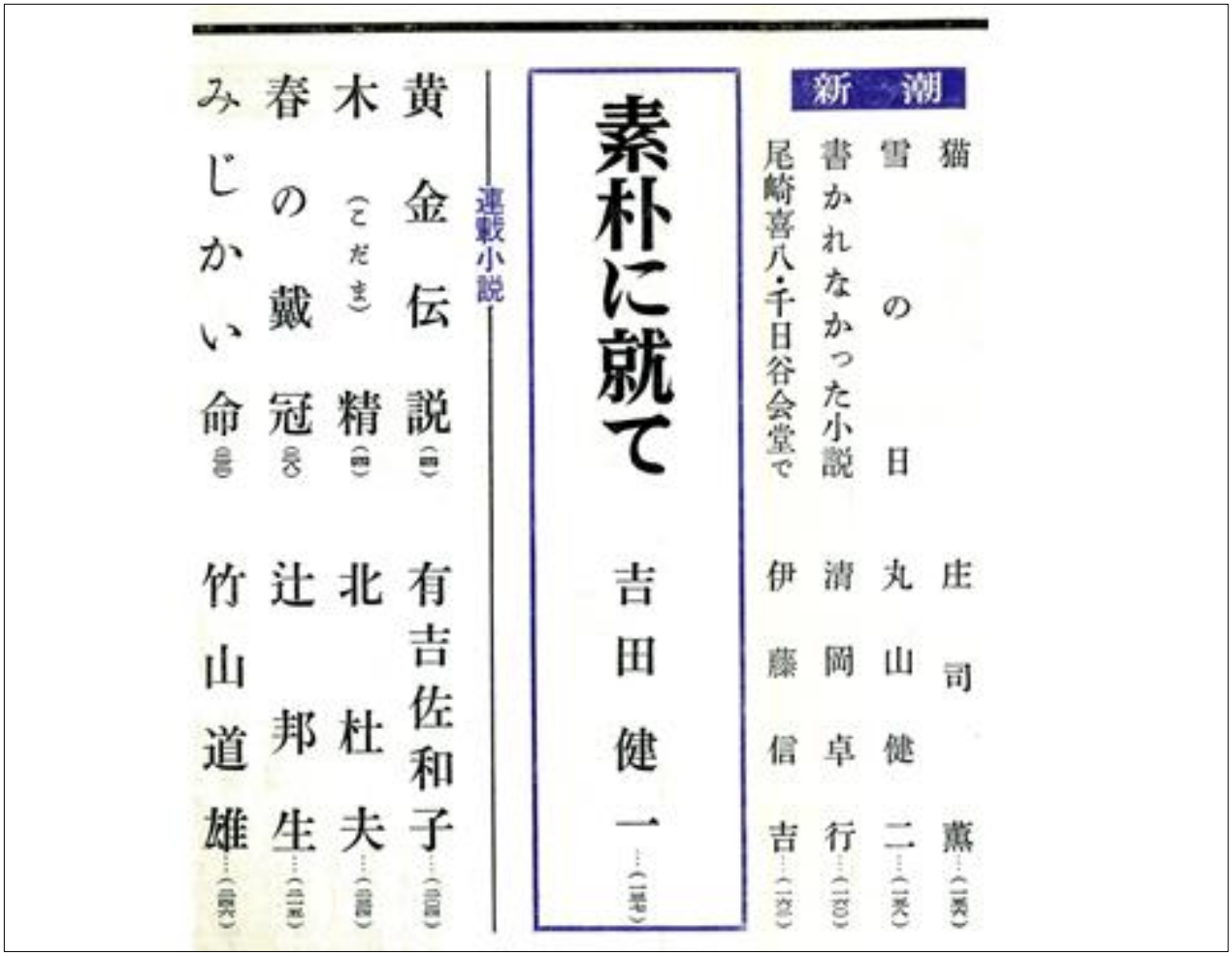


図 4
雑誌「新潮」1974 年（昭和 49 年）4 月号目次
北杜夫著「木精」と辻邦生著「春の戴冠」が連載小説として収載

北杜夫は、この『幽霊』『木精』の続篇を、晩年まで構想し続けている。晩年の代表作である『茂吉評伝四部作』[20,23,25,26]（1999 年大佛次郎賞受賞：72 歳時）の第二部『壮年茂吉』[23]（1993 年刊：66 歳）のなかには、以下の文章が唐突に挿入されている。「私はあくまでも小説家であり、死ぬまでにどうしても書いておきたい作品がいくらかある。それにとってはこの駄文は有体に言って妨げになる。それゆえ幾度か止めようかと考えたことも事実である。しかし、（中略）やはり父の歌はなるたけ多くの人に見聞きして貰いたいと思い直したしだいである。」[23] 要するに、評伝を書く時間があるのなら、それを小説の創作に費やすべきではないのか、という葛藤をこの時期においても抱いている。そしてその作品のひとつは、『木精』の続篇ではなかったかと想像される。

2000 年（73 歳時）に発表された『巴里茫々』[34]（雑誌・文學界に掲載）は、一応、小説の形態をとっているが（導入と終盤は夢の体験として語られる）、「辻邦生」や「なだいなだ」が実名で登場し、大半は巴里における辻邦生との思い出が追想される（辻・辻邦夫・辻夫妻など、「辻」の名前が 49 箇所で出てくる）。「躁病」「精神科医」である「私」が語る一人称の語りであり、ほぼ間違いなくノン・フィクションと考えてよい。本小説のなかで、マグロ調査船での航海 [7]を機に、初恋女性との不倫関係に終止符を打ったことが語られている[注25]。

辻邦生が急逝したのが 1999 年 7 月であり、『巴里茫々』の掲載が 2000 年 6 月であることを考えると、北杜夫は本作に盟友・辻邦生への哀悼の意を込めたものと考えられる。辻との交流は、作家となる以前の旧制松本高校時代から辻が亡くなるまで途切れることはなく、辻との思い出を語ることは、北自身の人生を回顧するものでもあった。「或る青年期と追想の物語」を副題とする『木精』の続篇は未完とされているが、中年期以降の逸話を「パリ」と「辻邦生」を通して描いた短篇小説『巴里茫々』を、この自伝小説シリーズの第三部・完結とみなすこともできるだろう。『巴里茫々』は北杜夫の追悼作品として、2011 年 12 月に単行本として刊行された。本作は、「異国小説」「自伝的小説」「エッセイ」の要素が投入された晩年の最重要作品の一つと考えられる。

7．結語

『巴里茫々』のなかで、北杜夫は独白する。「ようやく作家となった頃の、気負いとおじけ、そののちとにもかくにも『楡家の人びと』を完成したときの、かなりの自負とおののき。だが、私が作家としてまともであったのはそれまでであった。それからの、自分で吐気をもよおすほどの堕落と惰性にみちた生活と何の価値とてない紙屑にひとしい作品の山。そうしたことは、私自身、かなり以前からずっと考え反省してきたことであった。だが、なかなかそうした生きざまから逃れられないできた。一つは食べるための生活と、救いようのない惰性のためであったろう。」[34]

卓越した才能をもち、それを高く評価された創作者は、それ故に抱かざるをえない苦悩というものがあるのだろう。北杜夫は高校・大学時代に文学を志し、特にトーマス・マンの『トニオ・クレーゲル』に強く魅せられ、岩波文庫を常にポケットに入れ、ボロボロになるまで繰り返し読

んだ。芸術家と俗人という『トニオ・クレーゲル』の対立命題が次第に染み込んでいき[注 25,26]、自分はものを書いてゆくより仕方がない存在なのだと思うようになったという[51)]。

しかし北杜夫を愛読する多くの日本人は、北杜夫に対して畏怖の念を抱くわけではないし、「天才作家」や「文豪」として崇拝したいと思っているわけでもない。我々は、「永遠の昆虫少年」「永遠の文学青年」であり、それでいて「食べるための生活」に追われた北杜夫に対して、「親愛の情」を抱くのである。作家・川上弘美は述べている。「北杜夫を読んでいると、いくつかの不思議があらわれるのだが、わたしにとっての一番の不思議は、北杜夫を好きになってしまうということだった。（中略）というわけで、高校生の頃わたしは、北杜夫の写真を定期入れにしのばせていた。」[5)]

芸術家と俗人、抒情性とユーモア、躁と鬱、動と静、喧騒と静寂、海と山、母国と異国、崇高と堕落、不遜と謙虚、憤怒と微笑、滑稽と悲惨。それら異質なるもの全ての総体が、北杜夫が創作した作品群であり、日本人が愛してやまない「作家・北杜夫」なのではないかと思われる。

謝辞

本論作成にあたり、貴重なご助言を賜りました竹内正先生、ご高閲いただきました斎藤国夫先生、栗原正哉様に深謝申し上げます。また本論寄稿にあたり御承諾を賜りました斎藤喜美子様に深く感謝申し上げます。

本論に関連して開示すべき利益相反はない。本研究は JSPS 科研費 JP16K13194 の助成を受けたものである。

注　1：もっと大きなわけかたとして、「マンボウ派」と「幽霊派」がある[3)]。「『幽霊』は私の処女長篇であるばかりでなく、私に青春という言葉をもっとも憶いださせてくれる作品である。読者の手紙とか雑誌のアンケートによると、私には『マンボウ派』と『幽霊派』という、ごく大ざっぱにわけて二種類の読者がいて、後者は、『楡家の人びと』よりも『幽霊』を好んでいるらしい。」（北述）[36)]

注　2：『楡家の人びと』が発表された頃の時代は、「エンタテインメント」雑誌のことを「中間小説」雑誌と呼んでいた[39)]。純文学と大衆文学の中間に位置する小説の意で、第二次世界大戦後の文壇ジャーナリズムで用いられた用語。

注　3：『谿間にて』は台湾を、『夜と霧の隅で』はドイツを舞台としている。『夜と霧の隅で』は芥川賞受賞作品であるが、「自作」[30)]のなかでとりあげていない。『夜と霧の隅で』に対する北の自評。「はっきり言うと、失敗作だと思っています。」「賞をもらったりしたけれども、ぼくからいわせると、ちょっときわもの的な作品だったかもしれません。」[35)]。

注　4：『百蛾譜』は、1950 年に雑誌・文芸首都に掲載され、その後、エッセイ・短篇小説集『へそのない本』（1963 年）に収録された。『狂詩』も 1950 年に文芸首都で掲載、1957

年に改稿して同誌に再掲、同年上半期の芥川賞候補作となったが落選、短篇小説集『牧神の午後』（1965 年）に収録された。『谿間にて』は、1959 年に雑誌・新潮に掲載、同年上半期の芥川賞候補となったが落選、短篇小説集『羽蟻のいる丘』（1960 年）に収録された。『私はなぜにしてカンヅメに大失敗したか』は、1991 年に週刊小説に掲載、同年発刊の単行本『日米ワールド・シリーズ』に収録、2012 年に文庫化されている。『巴里茫々』は、2000 年に文學界に掲載され、北杜夫が逝去後の 2011 年 12 月に単行本として発刊された。

注　5：フィクションとノンフィクションに関しては、『白きたおやかな峰』の創作余話で、北杜夫が次のように書いている。「この小説に用いたもっとも大きなフィクションは、第二次アタック隊のことである。増田が一人で山頂に向うことなどはもちろんあり得なかった。」「私が読者から貰う手紙は大部分若い人からである。そして、小説のフィクションと事実とを混同してしまうことがかなり多い。『白きたおやかな峰』はその極端な例で、一人でアタックに向かった増田はその後どうなったか、隊員たちは無事に帰国したかという類の問がずいぶんと多かった。この稿で真相を書いたわけだが、彼らの大半はがっかりしてしまうかも知れぬ。だが、小説というものはそうしたものなのである。」[36)]

注　6：本文章は、文献 8 の「あとがき」に掲載。さらに奥野健男は、『幽霊』文庫版（新潮社）の解説で本文章を取り上げた。「ここに集めた他の作品」とは「昭和二十四年に書いた『百蛾譜』『幼いメルクリウス』『茸』『岩造の話』など『病気についての童話』と題される掌篇群と、昭和二十五年の『牧神の午後』『狂詩』『パンドラの匣』『硫黄泉』を指し、いずれも『幽霊』より少し前か、同時期に書かれたものである」と奥野は解説している。

注　7：「今年の春まで書けなくって、秋から四つほどつづけて発表した」は、「夏は躁病、冬はうつ病」[32,53)]の気分変動が反映されての結果かもしれない。

注　8：メキシコの話は『埃と燈明』、ベルリンの話は『星のない街路』、地球外の話は『不倫』、朝鮮の話は『浮漂』。『埃と燈明』は、「これは当時、何も書く題材がなく、ちょうどメキシコから貰った医学部の先輩のハガキが触媒になって、もう帰国していた彼からメキシコの片田舎の話を聞き、半分フィクションをまじえてでっちあげたものだ。」[36)]との由。

注　9：『酔いどれ船』第四話の主人公のモデルは、カナダとアメリカの精神病院に勤務歴のある慶應大学病院神経科の後輩 K 医師で [36)]、『月と 10 セント』[11)]ではニューヨークの友人 K として [45)]、『どくとるマンボウ医局記』[22)]では「クマさん」として登場する。

注 10：『どくとるマンボウ航海記』の成功もあり、その後も『南太平洋ひるね旅』『マンボウ響躁曲 ―地中海・南太平洋の旅』『親不孝旅日記』などの旅行記が出版されている。

注 11：「どくとるマンボウ」を冠した作品の初刊は、『どくとるマンボウ航海記』を刊行した中央公論社からのみであり、その後、新潮社から文庫化される形となっている。「この『どくとる』をつけた本は、初めの『航海記』の恩義から、今のところ中央公論社のものだけにしている」（北述）[36)]。ただし、日本経済新聞連載の『私の履歴書』を書籍化した『どくとるマンボウ回想記』[30]だけは、中央公論社以外の出版社から発刊されている。

注 12：なだいなだによる『どくとるマンボウ航海記』発刊当時の北杜夫に関する評。「彼は、今まで小説という、自分の作っていた枠によって殺していた自分の、笑いへの可能性を確かめた。彼は、そこで、自己と自己の周囲の世界を書く自信も得たし、文学の中で笑いの意味するものを悟ったのではないかと思う。笑いは、日本の近代文学にもっとも欠けていたものだし、笑いは評価のさまたげにもなっていた。」[46)]

注 13：例えば、父・斎藤茂吉は国民的歌人だが、創作活動とともに精神科医として病院経営を続けた。北杜夫と同じく精神科医であり作家でもある堀内秀（なだいなだ）も、精神科医として勤務し続けながら創作活動を行っている。

注 14：例えば、ユーモア小説『奇病連盟』の結末はハッピーエンドだが、最終章は「小団円」と題されており、「大団円」としなかった理由も小説内には記されている。「大団円のあとから、真の人生が開かれ、物語は始まるのではないか。大団円とは一瞬の錯覚、一時のゴマカシにすぎないのではないか。どんな小説でも永久につづけるわけにはいかない。そこで小説家は『大団円』などという文字を記し、あとは野となれ山桜、無責任に『終』と書き、どこかへ飲みに行ってしまうのだ。」[9)]

注 15：『どくとるマンボウ回想記』では、『白きたおやかな峰』に対して肯定的な自己評価もしている。「新潮社の純文学書下ろし特別作品の一作として書かれたものだが、まあ高級エンターテインメントのたぐいであろう。しかし、それだけ読者を愉しませることができたかも知れない。」[30)]

注 16：文献 31 で同じエピソードが語られており、本小説は『みずうみ』（文献 27 に収録）を指す。

注 17：具体的な執筆枚数に関しては、1976-77 年（49-50 歳時）発刊の『北杜夫全集』の「創作余話」に「いちばん書いたのは、1 カ月に 200 枚」[36)]との記述がある。1984 年（57 歳時）発刊の文献 17 には、「最高のときで、月産 900 枚」とあり、これが 1980 年（53 歳時）の躁状態での「最速執筆枚数」と考えられる。さらに、2001 年（74 歳時）発刊の文献 28 では、「鬱のときは月産 7 枚などという情けない状態になるが、躁になると月産 600 枚も書くこともある。」とある。

注 18：2000 年 6 月の月刊文芸誌「新潮」に、「北杜夫氏『幽霊』の第三部に着手」の題で以下の文が掲載されている。「作家の北杜夫氏が、長い『休眠』から覚めて、このところ活発な執筆活動を再開している。（中略）その北氏が『幽霊』『木精』に続く魂の自伝の第三部『病葉』（わくらば）に着手した。主人公がドイツ留学を終えて帰国してからのことが書かれるが、『どくとるマンボウ航海記』がベストセラーとなる一方で、名作『楡家の人びと』が絶讃され、一躍人気作家となった氏の心のありようが、いかに小説化されるかきわめて興味深く、著者が敬愛するトーマス・マンに比肩する記念碑的教養小説の完成が待たれる。もっとも、そのためには、執筆には最適のいまの『軽躁』状態が、これ以上は昂進せず、また元の『鬱』にも戻らないのを祈ることしきりである。」 ちなみに、北の初期詩篇のひとつが「病葉（わらくば）」の表題を持つ（文献 12 に収載）。元新潮社編

集者の栗原正哉氏の記述は以下。「『幽霊』『木精』につづく〈心の自伝第三部〉『病葉』の構想もあった。その副題は、初め『ある中年期と回想の物語』で、やがて『ある堕落と覚醒の物語』に変わった。平成 12 年のほぼ最後の躁病期には、『病葉』の連載を始めるときの宣伝コピーは、『化石化した北杜夫、ついに蘇る！』とすると、自ら宣伝文までつくった。しかし、この続編はついに書かれることはなかった。」[40)]

注 19：『ぼくのおじさん』の「あとがき」には、「わたしがこどものころ、幾人かのおじさんがいました。なかでも一人のおじさんのことを一番よく思い出します。そのおじさんは、動植物が好きで、草花や虫のことについて、よく小学生の私を指導してくれました。おじさんからもらった『動物物語』という本は、そのころの私の愛読書でありました。わたくしにとってはなつかしい、恩のあるおじさんです。」とある。この北杜夫の叔父は、本名が斎藤米国（1909-1944 年。結核にて 35 歳で死去）で [37,42)]、小説『楡家の人びと』『為助叔父』『おたまじゃくし』『硫黄泉』などの登場人物のモデルとなっている。

注 20：『父っちゃんは大変人』の執筆に関しては、エッセイ『マブゼ共和国建国由来記』[14)]に詳しい。『父っちゃんは大変人』を連載中の 1980 年 9 月から躁状態となり、その後、小説と同様に、自宅を「マンボウ・マブゼ共和国」として独立宣言する。小説中には、躁うつ病の作家・北杜夫が登場する。

注 21：大河小説『楡家の人びと』では、楡基一郎（モデルは北の祖父・斎藤紀一）が大言壮語する躁的人物として、その養子となる楡徹吉（モデルは父・斎藤茂吉）が抑うつ的人物として描かれている。

注 22：太宰治の小説『ダス・ゲマイネ』にも、作中に作者自身（作家・太宰治）が登場する。北杜夫は『ダス・ゲマイネ』を学生時代に読んでおり、最初期作品『西瓜』を創作時の日記に、「調子にのって、どうもダス・ゲマイネになるふうがあるから気をつけねばならぬ。」（1948 年：昭和 23 年 8 月 2 日）と著している [18)]。初期作品集『牧神の午後』のあとがきでも北は、「『牧神の午後』は、太宰治の文体を意識して模倣している。高校時代、私は太宰を愛読したものだが、その後読み返すことは絶えてない。こういうものを書いているところを見ると、このころはまだ愛好していたらしい。」と述べた。奥野健男は、この北杜夫の弁を引用して、「文体から発想にいたるまで、骨の髄まで太宰にいかれて、自分か太宰かわからないようになっているとしか思えない小説を書いていた北杜夫の、最近刊行された初期作品集に附せられた言葉である。このそっけない言葉の裏には、太宰の影響から自立するために払った苦々しい体験が秘められているように思える。」と評した [49)]。

注 23：この北杜夫の発言に対して対談者の篠田一士（文芸評論家）は、「北さんの書かれたものすべてを包含した、いわゆる『北文学』というものを考えた場合には、雑文の読者が多くいるということはね、非常にだいじなことだと思うのです。」「いわゆる『文壇文学』というのは自然主義以来あるわけです。そういうものとは違う地点にはっきり位置をもっている」「日本の近代文学というのはどうしても、自然主義から私小説の流れのなか

にある（中略）。そして、そこからかなり離れた地点に『北文学』はあるわけなのです。」と論じた [35]。奥野健男は自著「日本文学史」のなかで、「戦後、私小説は戦前の狭小で歪んだ日本文学や文壇文学の象徴として克服否定すべき対象として批判にさらされ、理念上は文壇の主流ではなくなりました」と解説している [47]。「北文学の自伝的小説は、私小説か否か」という命題は面白い観点と考えるが、日本近代文学史の文脈や「私小説」の定義を踏まえて論じられるべきものであり、稿をかえて考察する。

注 24：北杜夫が愛読したトーマス・マン著の『トニオ・クレーゲル』は、北杜夫のペンネームの由来でもある。「松本とか仙台の寒いところにいたから、まず、北として、それからトニオ・クレーゲルをもじって、杜二夫にした。でも北杜二夫ではあんまりおさまりがよくないので二をとったわけです。」[29]

注 25：不倫とトニオ・クレーゲルに関する北杜夫の弁。「初恋の女性とはかなり長くつづいたが、不思議に罪悪感はなかった。当時の倫理観からすれば、人妻との不倫は反社会的な行為とされたが、私は自分を社会から逸脱した存在と決めていたから少しも痛痒を感じなかった。当時の私は、トーマス・マンが、『トニオ・クレエゲル』で書いている『芸術家』と『市民』の対立命題に惹かれていた。小説家を目指している自分は、勤勉な生き方ができる市民などではなく、『緑色の馬車に乗った』流浪の民のような存在であると信じていた。そうしたアウトサイダーである以上、平凡な結婚より不倫のほうがふさわしいというわけである。」[28]

注 26：神話学者・ジョーゼフ・キャンベルによる『トニオ・クレーゲル』の対立命題に関する解説。「トニオの父親はれっきとした大商人です。故郷の町の名士です。ところが、息子のトニオは芸術家肌なので、ミュンヘンに飛び出して文士仲間に入る。その連中はただの金もうけや家族生活というものを見下しています。ここでトニオは二つの極の中間にいるわけです。一方は父親。これは善良な父親で、責任感やなんかに富んでいるけれども、自分の人生のなかで思い通りのことを一度もしたことがない。もう一方が、故郷を逃れて、そういう生活を批判している人間です。けれどもトニオは、そういった故郷の人々を心から愛している自分に気づきます。」[2]

文献

1）Andreasen NC: The Creating Brain: Th s e Neuroscience of Genius, The Dane Press, New York/Washington,D.C. 2005.（長野敬、太田英彦訳：天才の脳科学．創造性はいかに創られるか．青土社，東京，2007.）

2）Campbell J, Moyers B: The Power of Myth. New York, Doubleday, 1988.（飛田茂雄訳：神話の力．早川書房，東京，1992.）

3）保昌正夫（構成）：読者参加企画 マンボウ派 vs『幽霊』派 激突す！ 別冊新評北杜夫の世界．新評社，東京，1975.

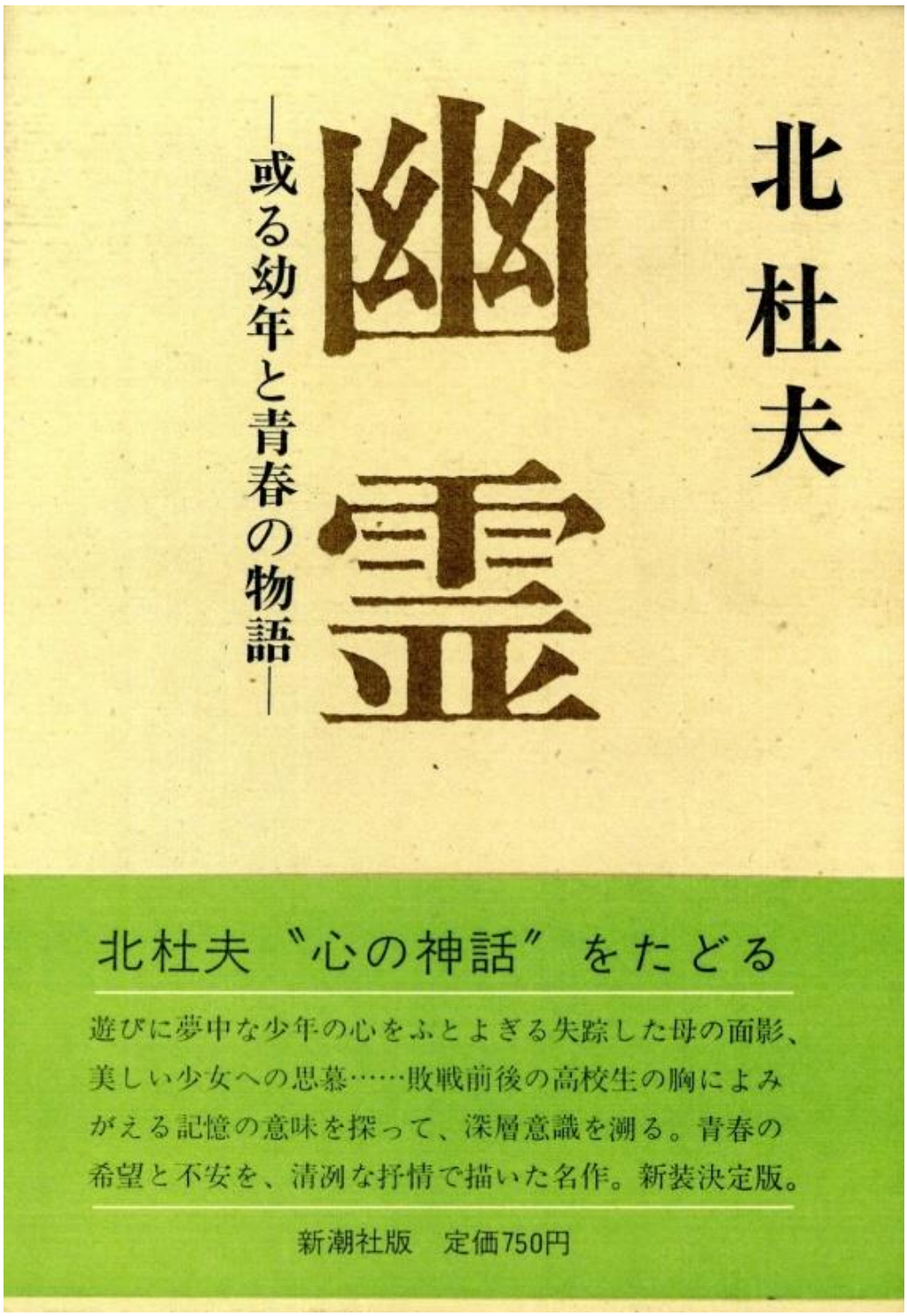
4）石原千秋、磯﨑憲一郎：日本離れした文学　ひとつの源流として北杜夫．文藝別冊・北杜

夫・どくとるマンボウ文学館．河出書房新社，東京，2012.
5）川上弘美：定期入れ．文藝別冊・北杜夫・どくとるマンボウ文学館．河出書房新社，東京，2012.
6）北杜夫：幽霊．文芸首都社，東京，1954.（1960 年に中央公論社、1975 年に新潮社より刊）
7）北杜夫：どくとるマンボウ航海記．中央公論社，東京，1960.
8）北杜夫：牧神の午後．冬樹社，東京，1965.
9）北杜夫：奇病連盟．朝日新聞社，東京，1967.
10）北杜夫、辻邦生：若い日と文学と ―北杜夫・辻邦生対談．中央公論社，東京，1970.
11）北杜夫：月と 10 セント ――マンボウ赤毛布米国旅行記．朝日新聞社，東京，1971.
12）北杜夫：北杜夫全集 1 牧神の午後・少年．新潮社，東京，1977.
13）北杜夫：北杜夫による北杜夫．青銅社，東京，1981.
14）北杜夫：マブゼ共和国建国由来記．集英社，東京，1982.
15）北杜夫：マンボウ交友録．読売新聞社，東京，1982.
16）北杜夫、埴谷雄高：さびしい文学者の時代 ―「妄想病」対「躁鬱病」対談．中央公論社，東京，1982.
17）北杜夫：ぴーぷる最前線 北杜夫．福武書店，東京，1984.
18）北杜夫：或る青春の日記．中央公論社，東京，1988.
19）北杜夫、埴谷雄高：難解人間 vs 躁鬱人間．中央公論社，東京，1990.
20）北杜夫：青年茂吉 ―「赤光」「あらたま」時代．岩波書店，東京，1991.
21）北杜夫：神々の消えた土地．新潮社，東京，1992.
22）北杜夫：どくとるマンボウ医局記．中央公論社，東京，1993.
23）北杜夫：壮年茂吉 ―「つゆじも」～「ともしび」時代．岩波書店，東京，1993.
24）北杜夫：手塚治虫さん．手塚プロダクション＋村上知彦編「手塚治虫がいなくなった日」．潮出出版,東京，1995.
25）北杜夫：茂吉彷徨 ―「たかはら」「小園」時代．岩波書店，東京，1996.
26）北杜夫：茂吉晩年 ―「白き山」「つきかげ」時代．岩波書店，東京，1998.
27）北杜夫：消え去りゆく物語．新潮社，東京，2000.
28）北杜夫：マンボウ愛妻記．講談社，東京，2001.
29）北杜夫：マンボウ遺言状．新潮社，東京，2001.
30）北杜夫：どくとるマンボウ回想記．日本経済新聞出版社，東京，2007.
31）北杜夫：マンボウ最後の大バクチ．新潮社，東京，2009.
32）北杜夫、斎藤由香：パパは楽しい躁うつ病．朝日新聞出版社，東京，2009.
33）北杜夫、辻邦生：若き日の友情　辻邦生・北杜夫往復書簡．新潮社，東京，2010.
34）北杜夫：巴里茫々．新潮社，東京，2011.
35）北杜夫、篠田一士：物語りの重厚と洒脱．文藝別冊・北杜夫・どくとるマンボウ文学館．河出書房新社，東京，2012.（初出は、国文学 解釈と教材の研究 2 月号．学燈社，東京，

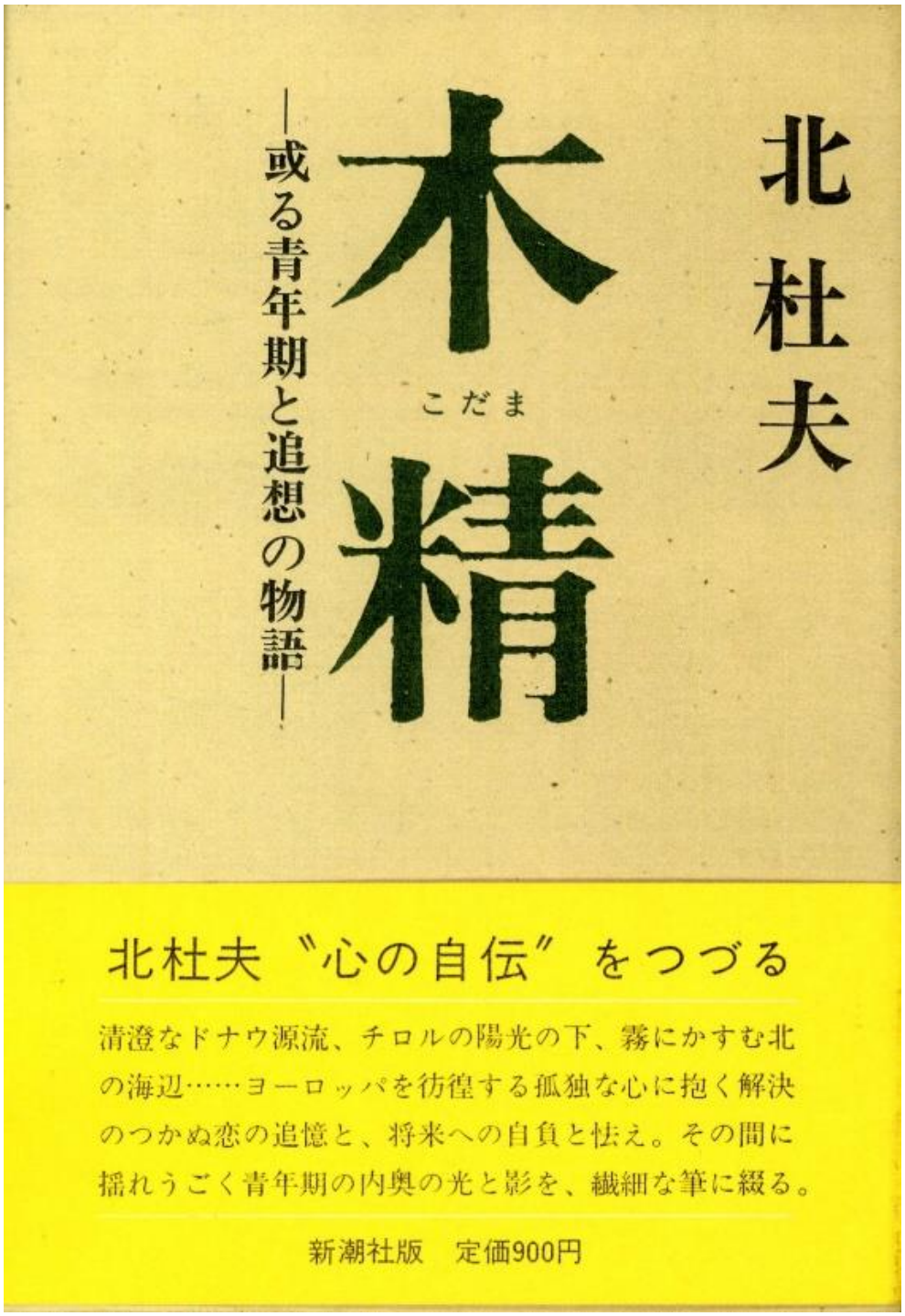
1973.）
36）北杜夫：創作余話．見知らぬ国へ．新潮社，東京，2012.（初出は、北杜夫全集・付録月報．新潮社，1976-77.）
37）北杜夫、辻邦生：ぼくたちの原風景．文藝別冊・北杜夫・どくとるマンボウ文学館．河出書房新社，東京，2012.（初出は、海 1 月号．中央公論社，東京，1984.）
38）北杜夫：私はなぜにしてカンヅメに大失敗したか．実業之日本社，東京，2012.
39）小林信彦：『楡家の人びと』の年.「北杜夫展」．世田谷文学館，東京，2000.
40）栗原正哉：無垢の魂．松本市立博物館、松本市立博物館分館旧制高等学校記念館ほか編：松本まるごと博物館連携企画展「北杜夫と松本」展示解説図録．松本まるごと博物館連携企画展，松本，2013.
41）Lange-Eichbaum W.：Das Genie-Problem. Eine Einführung. Ernst Reinhardt Verlag, München, 1951.（島崎敏樹・高橋義夫訳：天才 ―創造性の秘密．みすず書房，東京，1953.）
42）まえだあきら（作成）：斎藤家の人びと．別冊新評北杜夫の世界．新評社，東京，1975.
43）宮脇俊三：どくとるマンボウの誕生．世田谷文学館編「北杜夫展」――世田谷文学館開館 5 周年記念世田谷文学館，東京，2000.
44）森禮子、原子朗：北杜夫と「文芸首都」．別冊新評北杜夫の世界．新評社，東京，1975.
45）村松剛：北杜夫の世界．国文学・解釈と鑑賞,至文堂，東京，1974.
46）なだいなだ：『幽霊』から『楡家』まで．別冊新評北杜夫の世界．新評社，東京，1975.
47）奥野健男：日本文学史 近代から現代へ．中公新書，東京，1970.
48）奥野健男：北杜夫の文学世界．中央公論社(中公文庫)，東京，1982.
49）奥野健男：太宰治．新潮社，東京，1984.
50）奥野健男：中学時代からの北杜夫．文藝別冊・北杜夫・どくとるマンボウ文学館．河出書房新社，東京，2012.（初出は、北杜夫：マンボウ宝島．創隆社，東京，1981.）
51）斎藤国夫：7 つのキーワードで読む北杜夫ワールド．文藝別冊・北杜夫・どくとるマンボウ文学館．河出書房新社，東京，2012.
52）齋藤章二：愛すべき躁鬱病の叔父．文藝別冊・北杜夫・どくとるマンボウ文学館．河出書房新社，東京，2012.
53）高橋徹、松下正明：作家・北杜夫と躁うつ病 ―双極性障害の診断―．病跡誌，95：58-74,2018.
54）高橋徹、松下正明：作家・北杜夫と躁うつ病 ―顕在発症前エピソードと『どくとるマンボウ航海記』．信州大学附属図書館研究,8:57-87,2019
55）辻邦夫：私のなかの北杜夫．別冊新評北杜夫の世界．新評社，東京，1975.
56）辻邦生：私のなかの北杜夫．辻邦生全集 16．新潮社，東京，2005.

関連書籍

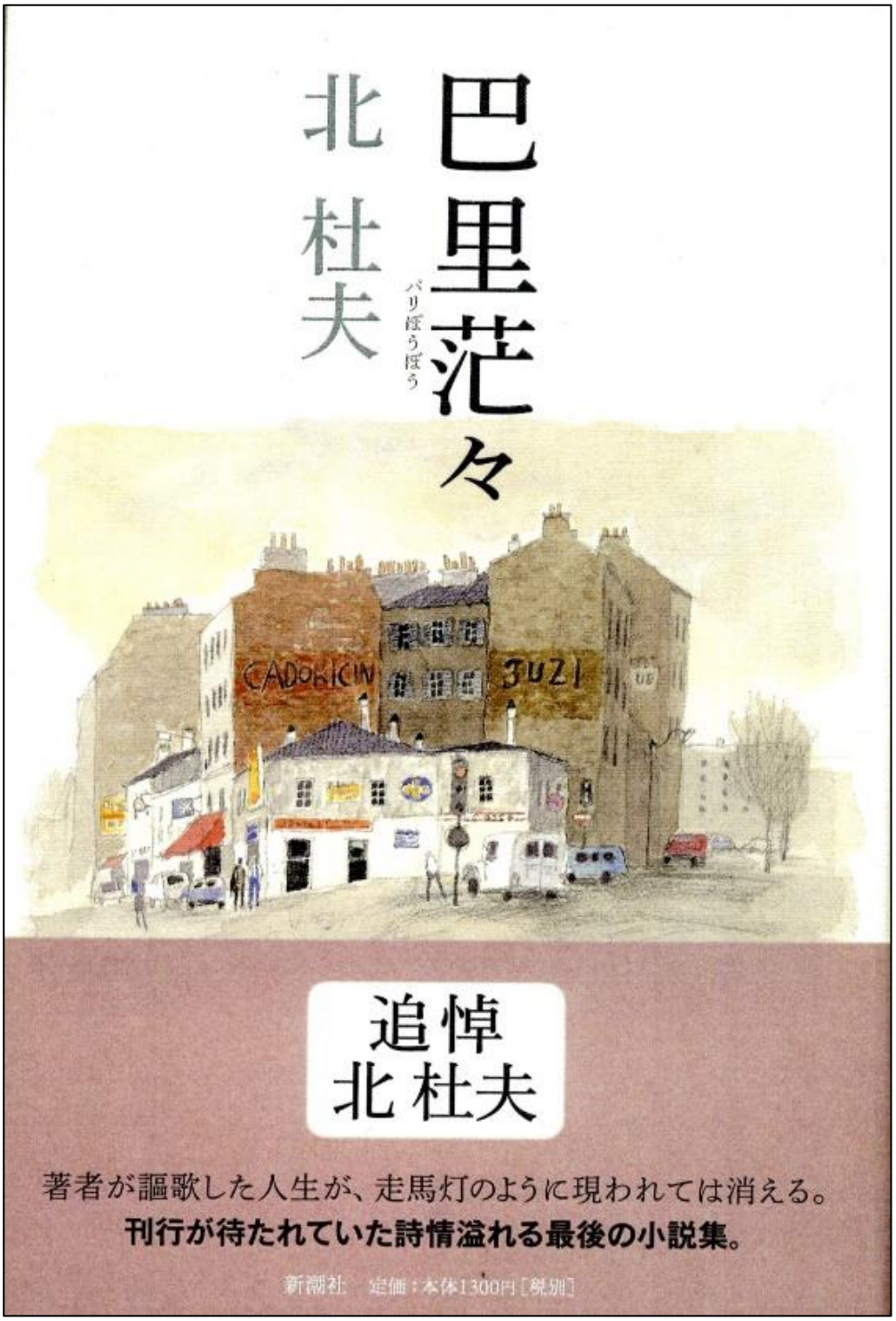
1. 北杜夫『幽霊　―或る幼年と青春の物語―』（新潮社版, 1975）
（信州大学附属図書館「北杜夫文庫」所蔵）



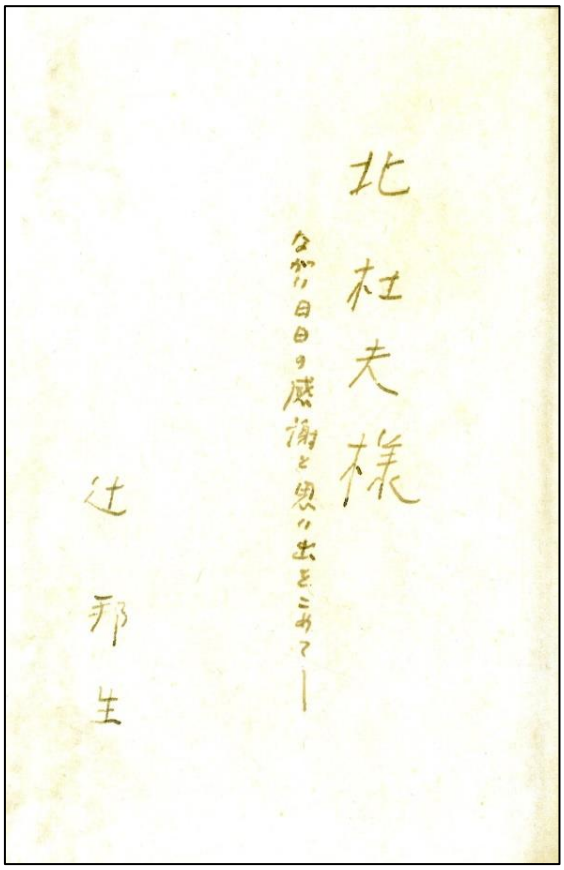
2. 北杜夫『木霊　―或る青年期と追想の物語―』（新潮社, 1975）
（信州大学附属図書館「北杜夫文庫」所蔵）



3. 北杜夫『巴里茫々』（新潮社，2011）（個人蔵）

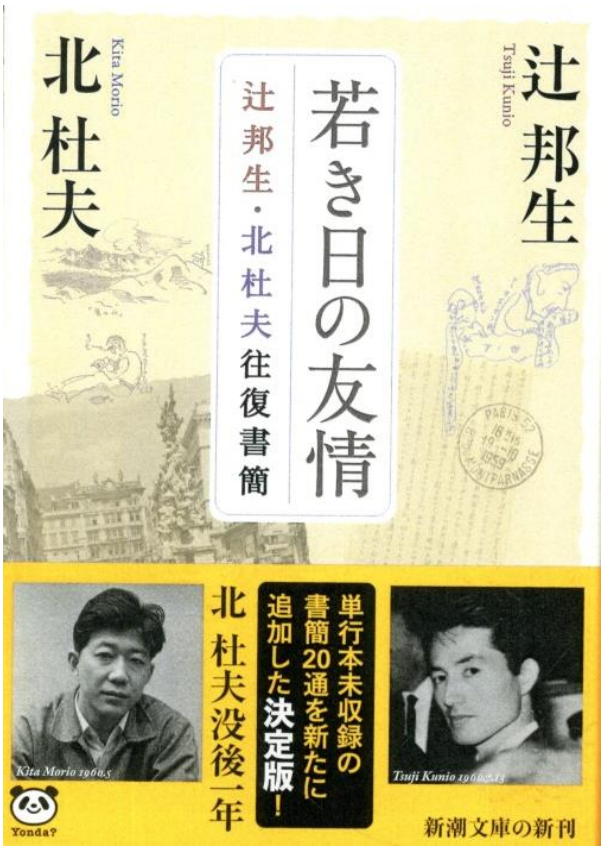


4. 辻邦生『回廊にて』（新潮社,1963）
（信州大学附属図書館「北杜夫文庫」所蔵：辻から北への贈呈本）



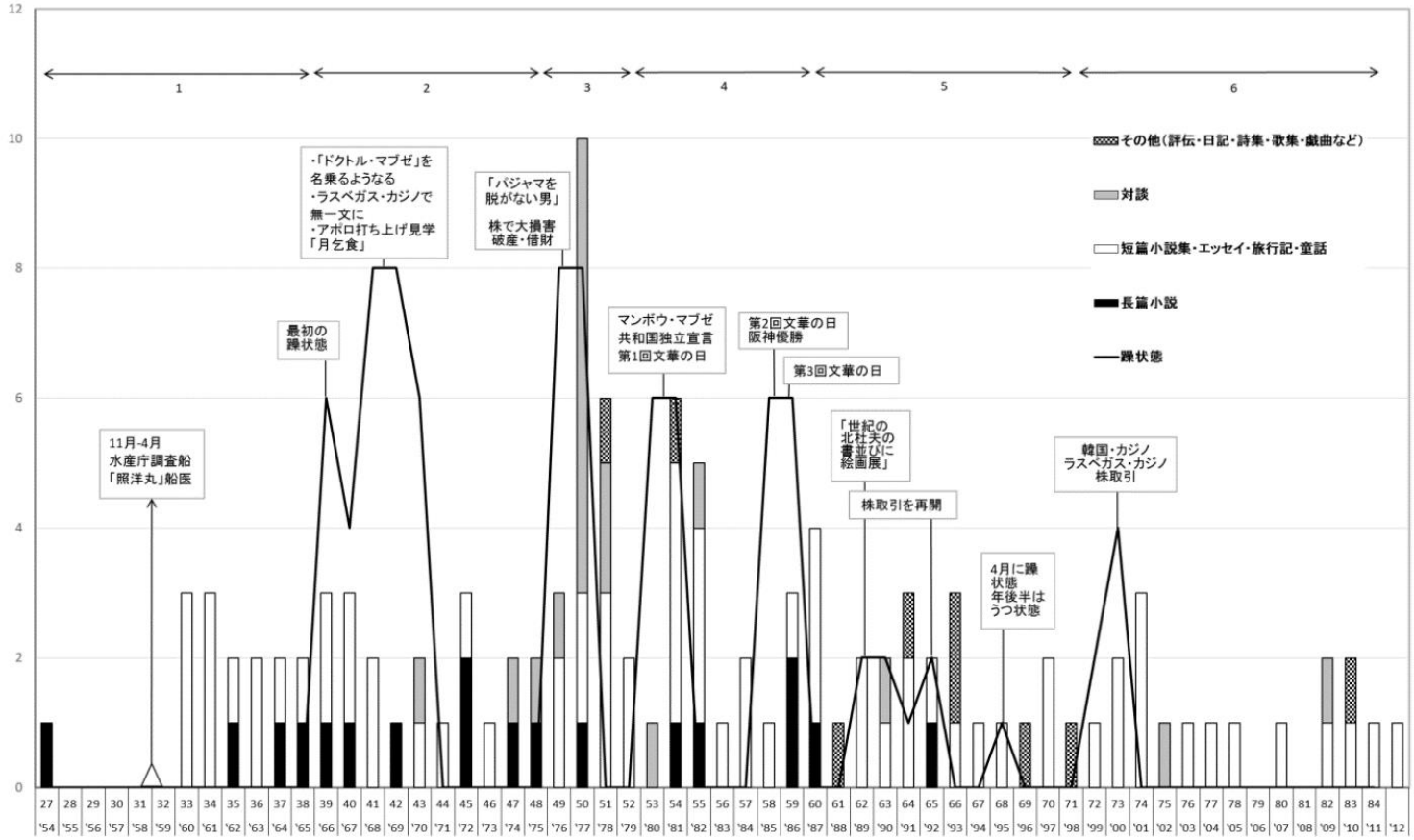
献辞「ながい日日の感謝と思い出をこめて—」

5. 辻邦生・北杜夫『若き日の友情　辻邦生・北杜夫往復書簡』(新潮社,2012)
（信州大学附属図書館「北杜夫文庫」所蔵）
6. 北杜夫、辻邦生『北杜夫・辻邦生集　筑摩現代文学大系 87』(筑摩書房, 1976)
（信州大学附属図書館「北杜夫文庫」所蔵）



参考資料：北杜夫の著作物と躁病エピソードの概観図（文献 53 より引用）

横軸の上段が年齢、下段が西暦年。著作物は、初出の単行本のみ対象とし、文庫本や全集は含めていない。また過去に発表された作品を再構成した短編小説集、自選短編集は除いてある。作品のジャンルは、「長篇小説」「短篇小説集・エッセイ・旅行記・童話」「対談」「その他」に分類した。棒グラフが、その年の単行本の出版数を表す。躁状態の線グラフは、その年に 1 回でも躁病エピソードがあれば上向きにプロットしてある。躁状態の程度をグラフの高さで表したが、これは具体的な逸話を踏まえて、筆者らが主観的に評価したものである[53]。



参考資料．北杜夫の著作物と躁病エピソードの概観図